

研究課題 (テーマ)	生後 6 か月～1 歳半の第 1 子を育てる父親における夜泣き対応への意識と関連要因		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	講師	朝倉 理映
分担者	富山県立大学 専攻科公衆衛生看護学専攻	名誉教授 学生	佐伯 和子 小林晴夏、槻采奈、佐藤真子、深野結衣
研究結果の概要			
<p>【背景・目的】</p> <p>第 1 子の児を育てる場合に育児不安が大きく、特に児の夜泣きへの対応は育児ストレスの一因となっている。また、夜泣き対応では約 7 割の父親が対処を試みていなかったが、近年父親が育児に関わることが増えている。</p> <p>そこで、本研究の目的は、生後 6 か月～1 歳半の第 1 子を育てる父親の夜泣き対応への意識と関連要因について明らかにすることとした。</p> <p>【方法】</p> <p>第 1 子の育児において夜泣き経験のある 6 か月～1 歳半の児を育てる父親を対象として、インタビュー調査を行った。夜泣きを経験した時期に児と妻と同じ家に住んでおり、母親・父親の職業・育児休業取得の有無は問わないとした。また、医療的ケアが必要な両親および児、入院している両親および児、両親・児に障害がある場合、シングルファザー、外国国籍の両親を除外基準とした。本研究は、富山県立大学研究倫理委員会「人を対象とする研究」倫理審査部会承認後、実施した。</p> <p>【結果】</p> <p>1) 研究参加者の属性</p> <p>研究参加者の年齢は 20 代前半～30 代後半であった。研究参加者の勤務形態は日勤 8 名、夜勤 1 名、日勤と夜勤のどちらもある者が 1 名であり、育児休業取得状況は取得者 6 名、期間は 1 か月～6 か月であった。子どもの月齢はインタビュー当時で 6 か月～1 歳 3 か月であった。また、参加者すべてにおいて、家族構成は父、母、子であり、夫婦共に働いていた。しかし、インタビュー当時はすべての母親が育児休業取得中であった。</p> <p>2) 生後 6 か月～1 歳半の第 1 子を育てる父親の夜泣き対応への意識と関連要因、対応</p> <p>夜泣き対応への意識についてのカテゴリーの持つ意味や関係性を検討した結果、【どうにかして子どもを泣き止ませたい】【子どもを泣かせておいてもかまわない】【夜泣きに対応するのは“親の役割”である】という 3 つのカテゴリーが抽出された。以下、父親の夜泣き対応意識とその背景に焦点を当ててストーリーラインをカテゴリーとサブカテゴリーを用いて説明する。</p> <p>夜泣き発生時、全参加者が共通して《夜泣き対応は子どもを育てる親として絶対通る道》と考え、【夜泣き対応をするのは“親の役割”である】と捉えていた。そのうえで、父親自身の睡眠への欲求を満たすため《一刻も早く泣きを収めて寝たい》や妻の負担を考慮し《妻の負担を減らしたい》という夜泣き対応への意識を持っていた。加えて、睡眠不足により妻の機嫌が悪くなることと夜泣き対応を天秤にかけ、《機嫌が悪い妻の対応より夜泣き対応する方がマシ》と捉える父親もいた。以上のように【どうにかして子どもを泣き止ませたい】という夜泣き対応への意識が生じることで、【自分で夜泣きに対応する】という判断に繋がっていた。また、子どもは寂しくない</p>			

ように対応しつつ親は睡眠を確保したいといった《親子の双方の欲求を両立させたい》という意識や、子どもの将来を見据え、《将来自立した人になってほしい》という意識があった。一方で、《自分が動かなくても妻が対応してくれる》という妻の配慮により、妻が夜泣きに対応するため、自分に対応しなくてよいという意識をもつ者もいた。これらの認識から【子どもを泣かせておいてもかまわない】という意識が生じ、【夜泣きに対応しない】という行動に繋がっていた。これらの夜泣き対応の意識に関わる関連要因として、全参加者に共通しているのは、【親としての自覚】であり、これが対応への意識の形成につながる基盤となっていた。関連要因としては、【生活スタイル】【父親の子どもへの認識】【父親の夜泣きへの認識】といった個人要因、【母親と父親の違い】【夫婦関係】といった家族要因、【性別役割】【勤務形態】【育児休業制度】といった社会的要因が挙げられた。【知識の形成】に関しては夜泣きへの知識を能動的に受け取る個人要因と受動的に受け取る家族要因になりうると考えられた。

【結論】

現代の父親は、親としての自覚を持ち、夜泣き対応を親の役割と捉えた上で、夫婦で協働し夜泣き対応を行っていた。夜泣きに関する事前の知識獲得により親の自覚を促すことや、夜間授乳における夫婦協働の促進、育児時間の増加に向けた育児休業取得の推進の必要性が示唆された。

【結果の公表】

第13回日本公衆衛生看護学会（2025年1月、名古屋市）において発表を行った。

今後の展開

学会誌に論文投稿予定である。